

ヴィクトリア朝の宗教と社会

いまや陽気な者はいなくなりました、みな信心深くなりまして。

——メルボーン卿よりヴィクトリア女王へ（一八三七年）

山 田 泰 司

従来のヴィクトリア朝観に修正を加える必要をと考えたキットスン・クラークは、一九六〇年のオックフォード大学におけるフォード講演『ヴィクトリア朝英国の形成』の中で、

実際、十九世紀について、十七世紀と、おそらくは一二世紀を除いて、たぶん、他のどの世紀においても、宗教の要求が、国民生活の中で、かくも大きな部分を占めたことはなかったし、また、人々が、宗教の名において語ることで、かくも大きな力を行使したことは

なかった、と言っても過言ではないであろう。⁽¹⁾

と語っている。また、同じ講演の他の箇所でクラークは、社会の全階層を動かした原動力のひとつは、ヴィクトリア朝の信仰復興であった、と言い、十八世紀後期以降、著しく勢いを得た福音主義運動と、その数十年後に、キールブル、ニューマンらが主唱したオックスフォード運動（一八三三）とを、二つの主要な宗教的勢力として挙げている。

しかし、これら二つの運動は、ひとしく英国教会内に

起こった運動でありながら、その起原、性格、影響において、全く異ったものであった。福音主義が、おもに平信徒向きで、しばしば反教権的であったのに対して、オックスフォード運動は、本質的に教権的で聖職者向きであった。福音主義が、大衆的で、ときにプロレタリア的でさえあり、その指導者層は、社会的に多様な階層からの出身者で、その活動力も全く予断を許さないものであったのに対して、オックスフォード運動は、構想、指導者層とも、エリート主義であり、福音主義運動よりもいっそう精密で、統制がとれていて、教会内の組織制度によりとらわれていた。社会的、政治的視点から、福音主義運動のほうがオックスフォード運動よりも、はるかに重要と考えられる理由は、オックスフォード運動の影響力が明確で強力であり得ても、それが主として国教会内にとどまるものであったのに対して、福音主義が国教会内はもちろん、およそ宗教界を超えて、外の世界に向かって強く働きかける大きな力を備えていたと観察されるからである。⁽²⁾

福音主義運動は、安易な理神論のとりこになっていた宗教の精神的懶惰と情緒的冷たさに対する反動として、十八世紀英国教会内に興った。当時、有力な宗派は自由主義派 (Latitudinarians) で、彼らは、信仰を心の問題としてよりは、頭の問題として扱い、教義上の諸問題に頭を悩まそうとしはしなかった。チャールズ一世または二世時代の偉大な神学者たちの説教や論文に反映されている十七世紀の宗教的情熱を、不体裁な「熱狂」(enthusiasm) として斥け、魂の抜けた教会になり果てていたのである。

一七三〇年代の終り頃、ウエズレー兄弟とジョージ・ホワイトフィールドらは、感情性と個人の魂の救済とを特色とする信仰復活の火をともした。ウエズレー派が、主として訴えたのは、伝統的に上流階級と結び付いていた国教会が顧みなかった労働者階級に対してであった。その間、ウエズレー派は、名目上は、国教会内にとどまっていたが、彼ら自身も、また、大部分の国教会信徒も、そうしていることに満足していられなかった。一七九五年、兄ジョン・ウエズレーが死んで数年後に、彼らは正式に国教会から脱退して、以後、最大最有力な非国教徒

団体を形成することになる。

国教会から離脱したウェズレー派(すなわちメソジストたち)の情熱は、国教会内にあって個人の救済への熱情を共にしながらも、依然として国教会の形式や教義に忠実であり続けた中流階級の人たちにも伝わった。したがって、英国教会福音主義運動は、古い組織内部におけるメソジスト精神の継承であったと言える。こうして、「福音主義的」(「Evangelical」)という語は、二様に適用される。狭義では、それは、国教会内の福音主義者をさし、広義では、国教会内福音主義者(ヴィクトリア女王時代には、「低教会派」(「Low Church」)と呼ばれるようになった)から、ウェズレー派によって主宰された非国教徒諸派にいたるプロテスタンテズムの全領域を含む意味で用いられる。以下、特にことわりのない限り、広い意味で用いることにする。

明確に宗教的な影響力としては、福音主義は、一七九〇年代から一八三〇年代の間において最も重要であった。フランスにおける動乱は、宗教的無関心、理神論的合理主義、徹底した無神論から発生したものと信じ、それまで流行していた、寛容な、しばしば弛緩した心的態度を

棄てて、正統的なキリスト教に復帰しようとする人が多くなった。国教会内の一派として、福音主義者たちは、教義に関して自由主義的な見解をもつ一派である広教会派運動やオックスフォード運動に対して、激しい反対の声をあげた。しかし、英国社会史上、福音主義が主として重要であったのは、十九世紀後半の社会に与えた道徳的気風のゆえであった。福音主義の特徴を示す道徳的基準、趣味、忌避事項は、俗に「ヴィクトリアニズム」と呼ばれるものの痕跡として、今日の英国でも通用している。

二

福音主義は、教義の細部や形式よりも、人間いかに生きるべきか、という問題にかかわり、生そのものための生よりは、来世への準備としての生を問題にした。個人の魂の救済こそが、この世でのあらゆる活動のゴールであり、神の恩寵こそが救いを得るための手段と見なされた。日常生活の一挙一動が、永遠の生のために魂を準備するのに重要であると考えられ、この世でのあらゆる行為が、天国の門で清算をする際、ひとつひとつ秤にか

けられ、毎日の一瞬一瞬が宗教に捧げられるべきである、と見なされた。行動の最高の指針は聖書であり、その解釈は、全く字義通りに行われるべきものとされた。それは、今日から見れば、想像もできないほど窮屈きわまる生き方であり、苛酷な戒律であった。

福音主義者の第一世代は、その多くが、ロンドンのクラッパム共用地 (Clapham Common) 周辺に住んでいた。たので「クラッパム・セクト」とあだ名されたが、彼らは、時間と、しばしば相当な財産を、人々を宗教に向わせるための善行にあてた。公的な仕事で、最もよく知られている彼らの業績は、一八〇六年に奴隷貿易を止めさせ、一八三三年に、すべての英属領での奴隷制を廃止させることに成功したキャンペーンであった。

しかし、奴隷制に関する彼らの関心は、改革の全般的プログラムの一部ではなかった。彼らは、自分たちの周囲の社会を変える努力をしなかった。そして、このために、大いに批判を受けた。外国の黒人奴隷のことを心配すると称して、国内の工場で働く白人奴隷を無視する彼らは、トリー党の偽善者ではないのか、と問われた。福音主義者の見るところ、肝心な点は、工場で働く奴隷

は、いつでもキリスト教の恩恵にあずかることができるが、黒人奴隷はそうではない。そして自分たちの唯一の関心事は人の魂を救うことにあるのだ、ということであった。世俗的な福利については、彼らは一向に気にとめなかった。また、社会的、政治的諸制度が、人間の魂の状態になんらかの影響を与えとも考えなかった。墮落した社会は、当然、個人における墮落に起因するものではある。しかし、社会を矯正する唯一の方法は、個人を矯正することである——そして、社会はあまり重要ではないのだから——彼らの努力は、まず第一に、個人に向けられたのである。

福音主義運動について最も重要な点は、それが、元来、決して社会的、政治的変革を目ざす革命運動ではなく、あくまで、個人の魂の救済を呼びかける保守的な運動であった、という点である。初期福音主義者たちの、道德的、社会的保守主義は、クラッパム・セクトの大指導者ウィリアム・ウィルバフォースの次のことばに、見事に要約されている。

キリスト教によって、社会階層の不平等は、下層階

級にとって、さほどいらだたしいものではなくなるのである。キリスト教は彼らに、勤勉で、謙虚で、忍耐強くなることを教える。キリスト教は、彼らに、彼らの卑しい道が神によって割り当てられたものであることを、忠実に自らの務めを果たし、満足して不便を忍ぶべきことを、現在の状態はきわめて短いものであることを、世俗の人々が、かくも熱心に争い合うことどもは、争いに値いしないものであることを、宗教が、分け隔てなく、すべての階級に提供する心の平和こそ、貧しい者の手のとどかない、すべての快樂よりも、より多くの真の幸福を与えてくれることを、この見方からすれば、貧しい者のほうが有利であって、目上の人々が、もっと多くの豊かな楽しみを享受しているにせよ、彼らは、下層階級が幸いにも免かれて多くの誘惑にさらされていることを、貧者の人生における地位は、恵まれないものであっても、神の手から当然受けるはずの地位よりもましなのだから、「衣食食を持てることで満足すべき」ことを、そして最後に、人間としてのあらゆる差別は、間もなく取り除かれ、真のキリスト信者は、みな、同じ父なる神の子として、同じ

天なる遺産の所有を、ひとしく許されることを、キリスト教は思い起こさせるのである。国家の現世の福利に与えるキリスト教の恩恵は、かくのごときものである。⁽³⁾

彼らの他の大きな業績は、上流階級のマナーやモラルを改革したことであつた。ウェズレーは、ウィルバフォースに、メソジストが貧しい者たちのためにそうしたように、支配階級に宗教へ心を向けさせるよう努力することを命じた。命に従い、ウィルバフォース及びその協力者たちは、手を尽して、そうした努力をした。ジョージ王朝後期に、上流階級の間から、飲んだくれ、放蕩、とばく、口ぎたないことば、宗教的無関心などが、かなり消滅したのは、彼らの努力に負うところが大きかったのである。

また、彼らの協力者には、ハンナ・モア（一七四五—一八三三）という天才的宣伝家がいた。権力者に、キリスト教的忠順を教える彼女の教訓物語は、フランス革命と、それに次ぐフランスとの戦争の数年間、貧しい者たちの間でも広く読まれていたし、また、彼女の教訓書は、

金持層を教化するために、同じく注意深く意図されたものであった。

こうして、彼らは、ヴィクトリア女王の即位に続く、敬虔で、家庭を大切に、因習道徳を重んずる時代への道を留意したのである。

英国教会内で、福音主義者たちは、信念を同じくする牧師たちのために、寺祿を買ってやる慎重な計画によって、次第に、その勢力を拡大して行った。そして、その押しつけがましい敬虔さのためにひやかされたり、その粗雑な神学のために批判されることはあっても、きわめて有力な団体としての地位を確立した。

彼らは、ヴィクトリア朝初期の数十年間、その力を維持または拡大したが、第一世代の福音主義者たちにあっては魅力的だった資質が、後継者たちの間からは失われてしまったことは、認めないわけにいかない。生まれかわるという体験と、神の愛を感じることにへの不断の喜びに満ちていたことは、口先だけのきまり文句になってしまい、初期指導者たちの寛容で穏健な禁欲主義は、後継者にあつては、硬直したものとなった。人間の魂を救うために、なすべきことが多々ある時に、神学上の論争に

かわってはいられないとする態度は、狭い反知性主義となり、救いを確信することから生ずる自己満足は、ともすれば、不愉快な独善になりがちであった。すでに、世紀の半ば頃には、こうした徴候が、かなり濃厚になった。

それでも、彼らの影響力は相当なものであった。一八五三年には、一万七千人の国教会牧師のうち、約六千五百人が、福音派に属すると考えられていた。これらの牧師たちは、教区で営々として励んでいたし、平信徒の福音主義者たちは、慈善団体で働いたり、布教のためのパンフレットを配布したり、貧乏人や病人を見舞ったりすることに精を出した。最も注目すべきヴィクトリア朝人士には、福音主義者の家に生まれ育った者が少なくない。文学者では、ブロンテ姉妹、マコーレー、ジョージ・エリオット、サミュエル・バトラ、ブラウニング夫人、政治家では、ピール、グラッドストーン、シャフツベリ卿、批評家、哲学者では、レズリー及びジェームズ・フイック、有力な宗教指導者では、E・B・ピュージ、ヘンリー・ニューマン、ベンジャミン・ジアウエット、

チャールズ・キングズレー、などがある。

だが、一八七〇年代までには、彼らの力は衰え始める。彼らは、聖書に基づいて、彼らの宗教を支えてきたが、聖書の真実性に加えられる、数多くの攻撃に答えることのできる知的指導者を持たなかった。一八四二年の炭坑法と一八四七年の工場法の強力な支持者であったシャフツベリ卿以後は、彼らは、ほかに偉大な政治家を出さなかった。慈善に対する彼らの態度は、ますます貧しい者たちからきられるようになり、裕福な者には、不十分だと思われるようになった。

三

ヴィクトリア朝文明を支えていた二つの力は、功利主義と福音主義であったと言われる。この二つの力を、不規則な形の模様にとえるならば、この二つの模様が重なり合う部分がかなり大きいことがわかるであろう。すぐれた『十九世紀英国国民史』を書いたエリー・アレヴィーは、「〔ヴィクトリア朝の〕英国社会の根本的パラドックスは、……まさに、理論的に相反する、これら二つの力が、部分的に合体し、結合したことに外ならない」

と述べている。感情性の力を振り所にする、準基本主義の宗教である福音主義と、冷たい分析的思考力を振り所にする、反宗教的な世俗的運動理論である功利主義とが、相反する前提から出発して、作用し合いながら、中流階級の価値観と呼ばれるものを作り出したのである。

中流階級ヴィクトリア朝人の典型は、企業心に富む成功者であった。彼はこの世の進歩を信じ、十戒を守り、天国を死後の安息所と見なした。そういう考えを持っていた人は、当時は、たぶん今日よりもずっと多かったに相違ない。彼は、マックス・ウェーバーの定義する、キリスト教資本主義社会に、すっぱりと入り込める人物であった。この定義によれば、資本主義的企業家のビジネスの成功は、彼が神によって召された「天職」の具体的な表われであり、神の恩寵のしるしであり、あるいは、少なくとも、成功した実業家が恩寵に値するという暗示である。週六日間、損得台帳に注いだ目を、七日目には、希望をもって、天国行きの帳簿に移す週日実業家にして日曜福音主義者が、ヴィクトリア朝人の典型であった。

中流階級の実業家が、その世俗的職業にたずさわると

めの猛烈なエネルギーを提供したのは、福音主義であった。人間が、自分自身の努力によって(すなわち、信仰の力によって)、魂を救済することができるとしたら、他のどんな目標でも達成することができるとは思えない。ヴィクトリア朝の人々が、さらにいっそう豊かで快適な社会を作るための力を持っていると感じて得られた自信は、福音主義に身を投ずることによって生じた精神的エネルギーに負うところが大きかったのである。

現世的な状況における勤労は、宗教的な背景における信仰と対応するものであって、その効能もまた、絶対確実な教義と見なされた。功利主義者も福音主義者も共に、この世の宿命を果たす第一の手段としての勤労の倫理を支持したが、それに加えて、福音主義者は、勤労を、天国の報いを求める資格をとるための手段と考えた。この世の務めに励むことによって、人は、あとで神の恩寵という資本金として返ってくる精神の銀行に預金しているのだ、と信じた。こうして、「勤労は礼拝なり」という等式が成立する。

プロテスタンティズムの倫理は、元来、儉約、克己、定められた仕事への献身、働くことのできなくなる夜が

やって来るという不断の意識などを重んずるものであるが、これら慎重さを旨とする美德は、ヴィクトリア朝という新しい産業社会の条件に、みごとに適合することがわかったのであった。そして、これらの美德のうち最大のものは、たゆまない勤勉であった。

働くことがすべてに打ち勝つ、という信念が、経済学の一見すきのない決定論における免除条項になった。マルサス、リカードの教義は、数学の法則のように、無慈悲な経済体系の中に個人を閉じこめているように思われたけれども、雇主または商人は、勤勉、創意工夫、そして禁欲、節儉のように適切な美德を実践することによって、自分を縛っている鎖をたち切るができる、と考えられたのであった。

雇主が支持していたのと同じ道德律が、労働者にも勧められた。仲間よりも熱心に働くことによって、彼は、より多くのものを生産し、その結果、より多くの金をかせぐことができる。バブを避けて、それによって節約した金を貯蓄銀行なり「友愛会」に(保険及び埋葬費のために)貯えることによって、自分を向上させることができる。ヴィクトリア朝にはやった格言の中で、「天は自

ら助くる者を助く」という格言が、一番どこでも見られるものであった。

この教えをモットーとする人格形成は、いわば、福音主義と功利主義との共同事業であった。他のすべての関連ある美德と組み合わされた、もうかる労働の倫理が、無数の大衆向き著述家たちによって推奨された。サミュエル・スマイルズのベストセラー『自助論』(一八五九)によって代表される、立身出世法を説く無数の本が出版されて、一般ヴィクトリア朝人の価値観に、測り知れない影響を与えた。その主旨は、きまって規律ある労働者は、けっきょくは成功するはずであり、貧乏は、とりもなおさず、怠惰と浪費の結果である、というものであった。

中流階級の信条ともいべきものを、スマイルズは、「個人の怠惰、利己主義及び悪徳の総計が、国家の衰微であるのと同様、国家の進歩は、個人の勤勉、活力、正直の総計である。われわれが大きな社会的悪として批難するのを常としているものは、個人自身の墮落した生活の当然の結果にすぎないことがわかるであろう」と述べている。しかし、このようなドグマは、大衆勤労者には、

あまり説得力を持たなかったのではあるまいか。彼らの経済的運命は、市場の浮き沈みと雇主の私利とによって決定されていたからである。ともあれ、社会的悪の万能薬として勤労をすすめることは、身体壮健な者や、その家族たちが、働きたくとも仕事がないような場合、うつろに響いたにちがいないのである。

あれだけ産業活動が活発だったヴィクトリア朝のことである。ディケンズが『マーチン・チャズルウィット』で描いたような、ビジネス界の不正行為がなかったとはいえない。しかし、商業道德の水準が、きわめて高かったと見られるのは、福音主義による抑制や、ためらいが、かなり強く働いていたからであろう。福音主義は、経済的自由放任主義を、個人の良心の重要性を強調することによって、補足したのであった。

十八世紀において、福音主義宗教は、カルヴィンの選民の観念を、大部分、切り捨てたという点で、平等化の作用を果した。ウエズレー兄弟が、彼らのおもな支持者を貧しい者たちの中に見出したという事実は、彼らの運動に、民主的な雰囲気を与えたことは確かである。しかし、フランス革命のショックは、福音主義が持っていた、

いくばくかの民主的な傾向を押しつぶしてしまい、その伝道者たちをして、旧来の固定した階級制度を守ること
に献身させる結果となった。「身のほどを知れ」という
のが、貧乏人に対する彼らのメッセージとなった。この
点では、福音主義は、普通選挙権という形での政治的民
主主義を主張した功利主義とは、遠く隔っていた。福音
主義のヴィクトリア朝英国への寄与は、間接的なもので
あり、政治的であるよりは、社会的なものであった。そ
の精神が、おもに宗教的な面から、個人的及び社会的道
徳にかかわる面へと一般化されて行くにつれて、その影
響は、中流、労働者階級から、上層階級へと及んで行っ
た。

こうして、福音主義は、社会の大部分に普及するよう
になった。経済的及び社会的不均衡にぐらついていた英
国において、道徳的福音主義の原理は、広く受け入れら
れ、国民の間に、かなりの調和をもたらした。

福音主義によって、ばらばらの階層が引き合わせられ、
英国に倫理的民主主義ともいべきものが形成されて行
ったのである。しばしば起る階級間の軋轢も、共通の道
徳を持っていることによって、多分に和げられたのであ

った。

四

ラグビー校の校長、トマス・アーノルドは、教会と
いうものは、「道徳的悪を抑え」、「人類の道徳的向上に
資するための」団体であって、十九世紀初頭の英国教会
の悪いところは、「宗教の社会的性格」を見失ってしま
ったことだ、という強い意見を持っていた。ローマカト
リック教会に対するヴィクトリア女王時代の敵意の主旨
は、それが有力な国々は、道徳的、社会的に立ち遅れて
いる、ということであった。ロンドンのある教区教会の
夕べの祈りに出席した、フランスの文学者イボリット・
テーヌは、「議長が演壇からではなく、説教壇からしゃ
べる倫理集会に出席しているような気がした」、という
感想を洩らし、英国の教会について、次のように書いて
いる。

「英国の」教会は、……道徳衛生課であり、精神管
理局といったものである。これらの理由で、キリスト
教に対する尊敬は、世論によって義務として、さらに

は、きちんとしたふるまいの一面としてすら、受け入れられている。ふつうの英国人なら、不信心者がよき英国人で、ちゃんとした堅気の間人でありうる、などということは、認めたがらないであろう。

この時代の経済的、社会的必要にふさわしい道德律が、十八世紀後期の宗教復活から生まれたという事実は、當時は、少数の知識人を除いて、すべての人々の思考や感情が、宗教的ことばでしか明確に述べることができなかった、という単純な事実によるものである。十八世紀啓蒙主義の非キリスト教思想は、せいぜい、ほんの少数者のためのものであり、それは、フランス革命の恐怖をひき起こしたという理由で、信用を失ってしまった。十八世紀の国教会は、形式主義に陥り、宗教的情熱を、なげかわしい「熱狂」に等しいものと考え、十九世紀の英国社会のために、それを結合すべき首尾一貫した、一連の信仰を残してくれなかった、と言えるかもしれない。そこで、急速な産業の発達と、急激な人口の増加の結果、社会に困難やひずみが生じたとき、最初は何ソジズム、次には福音主義が、分裂した社会の全階層の悩める人々

の心を引きつけずにはおかなくなったのだった。メソジストや福音主義者たちのメッセージは単純であった。キリストを、自分の個人的な救い主として認める者は、直ちに、救いが得られるというのであった。この即座の救済の約束は、ヴィクトリア朝以前、またはその初期においてのみ、主としてなされたのではない。一八六〇年代にも、大きな信仰復興運動があったし、一八七五年と一八八四年には、アメリカの特別伝道運動家ムーデーとサンキーが、イングランドで伝道を行い、成功を収めた。この二つの年代の間には、ウィリアム・ブリスの布教団が、救世軍（一八六五）として、正式に組織された。ヴィクトリア女王の治世の間、信仰復興の力は、衰えることがなかったのである。

しかし、ヴィクトリア朝の宗教には、ひとつの大きな限界があった。それは、社会の上層部（中流階級を含む）には拡がって行かなかったけれども、下へは、労働者階級の最上部どまりで、それより下へは降りて行かなかった、という点である。そのことを示す、最も有名な証拠は、一八五一年の三月の最終日曜日に行われた調査で、その日、教会、その他どんな礼拝所へも出席しなかった大人

の数は、イングランドとウェールズを合わせて一千八百万人のうち、最も内輪に見積っても、五百二十五万人あったという。これとは別に、比較的貧しい地区を担当する社会宗教福祉司は、十九世紀を通じて、聖書及びキリスト教信仰のイロハに対して無関心、または全くの無知が、いかに甚だしいかを報告している。だが、これは、あまりにも容易に「体裁、世間体」と同一視されるようになってしまった宗教の予測できる運命であった、といえる。

まじめな宗教家たちが、慈善を受ける「資格のある」貧者と、「資格のない」貧者とを区別したことが、正式な慈善行為のみならず、働く貧乏人に対する、真にキリスト教的な思いやりを制限することにもなった。また、非国教徒についていえば、彼らの法的社会的地位が、ヴィクトリア朝になって着実に向上したので、これまた、体裁のよさとの結び付きが強化され、そのために、彼らが、次第に政治的急進主義及び労働者階級との接触を失ってしまったことも原因のひとつであろう。それに加えて、ヴィクトリア朝の聖書崇拜が、読み書きのできる者は、ついでに行けるが、あまりできない者や全くできない者を、

宗教から遠ざけることになった。聖書中心のキリスト教は、まじめな宗教と、聖書という本質的に意味のはっきりしないテキストの綿密な研究とを同一視することによって、無味乾燥な哲学に陥りがちであった。それが生氣を取りもどすためには、執拗に、信仰復興運動という注射をうつ必要があった。しかし、ヴィクトリア朝中、後期の復興運動は、劇的な効果があったものの、地理的に限定されたものであり、たいがい長続きしなかった。その中で、長続した救世軍の成功は、下層階級以外の者を、わざと避けたことと、ロマンチックで、象徴的で、しかも音楽的な要素を取り入れたことにあった。国教会のアングロ・カトリック派が、儀式的要素を重視して、スラム街で、しばしば成功したのも、同じ理由によるものであった。しかし、大体において、国教会及び伝統的な非国教徒団体は、「暗やみの中の大衆」を抱きかかえることができなかった。チャールズ・キングズレーは、そのおもな理由のひとつを、次のように指摘している。

それは、われわれが悪いのだ。われわれは、聖書を、あたかもそれが単なる警官の特殊ハンドブックである

かのように使用してきた——重過ぎる荷物を積み込む間、牛馬をじっと我慢させて置くための阿片の投薬のように用いてきたのだ。⁽²⁾

こうした失敗は、もちろん、体裁尊重の結果とばかりは言えなかった。教会が、ヴィクトリア朝英国の他のすべての任意寄付団体と同様、都市の拡大、人口の移動に歩調を合わせて行けなかったためであった。伝統的な宗教団体は、国中に、教会や学校や日曜学校を建て、スラムにはセツルメントを設けた。しかし、どうにも追いつけなかったのである。他の社会的関心事におけると同様、ヴィクトリア朝の人々は、直面する問題のあまりの大きさに、当惑し、しばしば挫折させられた。しかし、彼らの名誉のために言って置けば、問題解決への努力を放棄することはなかったのである。

世紀が進むにつれても、ヴィクトリア朝の人々の宗教的活力は、ほとんど衰えることがなかったと信ずべき理由が十分にある。ヴィクトリア朝前期には、メソジストや旧非国教徒たちが先頭に立っていた。国教会は、だらしなく無能であり、地主階級と結び付いていたために、

産業の変化によって出現した新しい都市人口から離反していたからである。その頃は、不在牧師、数寺禄兼領、薄給の副牧師の時代であり、国教会の新しい教区を設けたり、あるいは現存する教区の活動を拡大するよりは、非国教徒の新しい礼拝所を充足させることのほうが、常に容易であった。当時は、典型的な教区牧師は、いなか牧師であって、地方地主と共に、農村社会の指導者であった。しかし、一八四〇年以降、宗教的拡張が、あらゆる面で発展した。国教会は、その組織を改革し、福音主義運動とオックスフォード運動から生ずる二つの影響力を実行に移すことを可能にした。

福音主義運動が、何よりもまず、個人的信心を刺激することを特色としたのに対して、オックスフォード運動は、生きた伝統の一部としての教会を、より鋭く意識すること、典礼をきびしく尊重すること、十八世紀に確立された聖書崇拜にとらわれない宗教的意識を鋭敏にすること、などを旨とするものであった。国教会内における革新と、新旧非国教徒派の持続的なエネルギーに、さらにローマカトリック教会の復活が加わった。この復活は、一八二九年のカトリック解放令、リヴァプールとロンドン

ンへのアイルランド人の大流入、一八五〇年のカトリック教の聖職階級制の回復（いわゆる「教皇の侵害」(“Papal Aggression”)）¹⁾ 一人の前オックスフォード運動の指導者、枢機卿マニング（無能なワイズマンのあとを継いで、ウェストミンスター司教になった）とヘンリー・ニューマンの大きな影響力、などに由来するものである。（マニングは一八七〇年代、八〇年代における労働者の社会問題に密接にかかわり、ニューマンは、はじめ背教行為をひどく非難されたが、晩年は、彼のカトリック教の穏健さと、彼が離れた国教会徒に対する寛大な態度のゆえに尊敬された。）

世紀の後半、目ざましい宗教的活動があったことは、数字が示してくれる。一八四一年と一八七六年の間に、国教会は、イングランドとウェールズに一千百二十七の新しい教会を建て、七千以上の古い教会を修復した。組合教会派は、その礼拝所を、一八六一年における二千二百三十六から、一九〇一年には四千五百七十九に増大させ、バプテスト派は、一千百五十から六千三百十三に増やし、ローマカトリック教会は、同じ期間に、七百九十八から一千五百三十六に増やした。²⁾ 女王の治世の終り頃

には、教会に「空座席」が増えて困ると苦情が言われたが、それは、宗教的無関心のせいよりも、ヴィクトリア朝の教会建設の熱意を物語るものであった。

労働者階級の無関心も、ときに主張されるほど、全面的なものではなかった。「労働者階級」という用語は、「中流階級」ということばと同様、正確な叙述を不可能にする。というのは、体裁のよさが重んぜられたために、極貧で粗野な者は、教会から閉め出されていたけれども、少しその度合が弱まると、入れてもらえたのである。女性が生ショールでなくボネットをかぶる余裕ができ、男性がカラーにネクタイを着用できる身分になると、教会の扉は、即座に開かれたのであった。実際、不可知論から非国教主義へ、次いで国教会へと進んで行く道程は、卑しい身分から身を起こして、やがて立身出世した者たちに珍しくない経歴であった。ヴィクトリア女王時代の不信心は、神学的または知的異議というよりは、多分に、社会的及び政治的反対の表われであった。

また、教会出席者が少なかったという指摘に対して、日曜学校の出席者の異常な数値を対比してみなければならぬ。一八一八年には、日曜学校出席者の割合は、人

口の四パーセントであったが、一八八八年には、イングランド及びウェールズで、四人について約三人の子供が、日曜学校に通い、そのほとんどすべてが、労働者階級の子供であったという。日曜学校は、一八七〇年の教育法の通過後も活発であって、ランカシャーでは、日曜学校を大人にまで延長するという強い伝統があった。

うまく行っている日曜学校は、しばしば、諸宗派連合であって、神学的には、きわめて素朴なものであったにちがいない。だが、世紀の終り頃までには、日曜学校運動と義務教育の普及とが組み合わされた結果、一九〇一年の労働者階級の子供たちは、たぶん、一八三七年の同じ階級の子供よりも、聖書について、よりしっかりした知識を持つようになっていたであろう。

確かに、人口の割合から見れば、教会へ行かない人の割合は、一八三七年よりも、一九〇一年におけるほうが、大きかったであろう。このことが、真の宗教的感情の衰えを、どの程度反映するものなのかは、宗教的感情を量的に測定することができない以上、判断できない。のちがいは、一八三七年には、大部分の人々が農村に住んでいたが、一九〇一年には、たいいていの人が都会に住む

ようになった、という、それだけの意味しかないのかも知れない。一八三一年に、村の教会に欠席するということは、小さな共同社会からの、目立つ自己疎外行為であったのにひきかえ、一九〇一年に町の教会に出ないということは、他の何百という無名の他人と一諸に行われる見分けのつかない行為であって、それゆえ、社会的意義など、ほとんど全くない行為であったであろう。

長い目で見て、一九〇一年までに教会出席率が、相對的に衰えたかどうか、ということよりも、もっと重要であったかも知れないのは、世紀の後半に、国民の神学と宗教家との神学に、大きな断絶が生じたことであった。

一九〇一年までの国民の神学は、一八三七年の公認の神学と、大体において、ほとんど変わりがなかった。それは、依然として、欽定訳聖書の無謬性に基礎を置くものであり、「聖書物語」によって養われたものであった。それは、センチメンタルな現実逃避の神学であり、来世における報いと罰の神学であった。それは、俗界の知的生活のみならず、一八三七年以来、発展しつつあったキリスト教会の知的生活とも接触を欠いていたのである。

国民の神学が、いかなる意味でも、知的でなかったか

らこそ、科学によって引き起こされた宗教界の知的困難によっても、国民に対する宗教の掌握が、ときに主張されるほど、弱まることなかったのであった。

伝統的な観念に対する、最初の知的打撃は、地質学者たちによって加えられた。彼らの研究は、世界は六日間で創造されたという聖書の物語りも、世界の歴史は紀元前四千四年のある十月の午後に始まったとする公認された計算も、共にくつがえした。

第二の打撃は、ダーウィンの『種の起原』(一八五九)と、『人間の由来』(一八七二)から明白になった進化論であった。この理論は、人間が動物とは全く別個の神の創造物であるとするキリスト教の中心的な教えをくつがえすものと考えられた。さらに、いっそう重大な打撃を加えたのは、アングロ・サクソンキリスト教全体が拠り所にしてきた聖書が、不正確なテキストであることを明らかにした聖書の本文批評であった。他方、自然科学の発達と共に、歴史研究によって、聖書の字句通りの真実性が疑問視された。聖書のある一部が伝説であるということになれば、やがて、その全部を伝説であるとして斥けることに反対する論理的理由はないように思われたの

である。

このような知的危機を生き延びて、比較的良好な状態で立ち現われたのは、キリスト教会の、きわだった業績であった。多くの牧師たちは、間もなく、キリスト教の基礎を、一般に認められた聖書のテキストの無謬性に置き続けることが不可能であることを認めた。一八七九年と世紀の終りとの間に、聖書の字句による靈感に対して、公然と不信の念を表明する人々を、牧師に任命することとをいとわない司教が、ますます多くなった。それは、十八世紀に教会が確立し、オックスフォード運動の首唱者たちが一八三〇年代、四十年代に、あれほど激しく非難した、自由主義的で包括的な信仰の伝統の、注目すべき再主張であった。

- (1) Kitson Clark, *The Making of Victorian England* (London, Methuen, 1962), p. 20.
- (2) 拙稿「ヴィクトリアニズムの歩み」『一橋論叢』第七十二巻第二号、一六六―八ページ参照。
- (3) William Wilberforce, *A Practical View of the Prevailing Religious System of Professed Christians* (1797) (1834 ed.) pp. 301-2.
- (4) Euse Halévy, *England in 1815* (The first volume

of *A History of the English People in the Nineteenth Century* (London, Ernest Benn, 1924) p. 509.
 (∞) Quoted in Basil Willey, *Nineteenth-Century Studies* (Harmondsworth, Penguin, 1969) p. 64.
 (∞) Hippolyte Taine, *Notes on England*, trans. Edward Hyams (London, 1957), pp. 157 and 193.

(∞) Charles Kingsley, *Politics for the People* (London, 1848).
 (∞) Owen Chadwick, *The Victorian Church* (London, Black, 1969) Vol. II, p. 241.

(一橋大学教授)